第三部　街娼の時代

第一章

1、サッポロ・メリー　2、水戸たか子　3、樋口冴子　4、アヤ、ブロンディ・テイ　5、市川順子　6、草間ゆりえ　7、熊谷友子

1　サッポロ・メリー

サッポロ・メリー（二十三・札幌・本名はわからない）は毎晩芝生の上でキャンプ・クロフォードの兵隊たちに体を売っていたが、四七年の九月も終り、寒い風が吹くようになってきたので、札幌の街じゅうを部屋をさがしてあるいた。メリーばかりでなく、彼女が知りあった洋娼たちはみんな部屋をさがしていた。

敗戦後、十万人もの人口を余計にかかえこんだ札幌では、空いた都屋はなかなかみつからなかった。やっとみつかっても、けばけばしい恰好の彼女たちに、快よく貸そうというひとはさらにまれであった。彼女たちははじめ卑屈な様子でたのみこんでいたが、そのうち、片言の米語をべらべらしゃべり、お土産にチョコレートや煙草を一箱ぐらい投げだしたりする方が、かんたんに部屋を借りられるということに気づいた。彼女たちが卑屈な態度であればあるほど、ひとびとは非難の眼を向けたが、彼女たちが米語をしゃべりチョコレートを投げ札びらを切ってみせると、ひとびとの態度の方がかえって卑屈になっていくのをみて、彼女たちは有頂天になった。

こんなふうにして、十月初旬にはメリーも豊平川べりの家に一部屋を借りた。四畳半で月五百円とのことだったが、彼女は「週」百六十円ずつ払うわ、と言った。貸主は彼女にぺこぺこした。彼女は嬉しいと思った。部屋さえあれば街角でアメリカ兵によびかける必要もなくなる。かわりに、部屋を持っている仲間どうしが二週間ほど前に作った「組合」の方へ、住所・営業時間・情夫のあるなしをとどけておけばそれでいいのだった。すると彼女たちの名前と住所録は、いつのまにか誰かの手で米語に書きかえられ、それぞれの名前の横に、Moist Lips, Bounding Waist（濡れた唇・弾む腰）とか、Exotic Sexual Arts（エキゾチックな性技）とか、Passionately Crying（情熱的に泣く）とかと註がつけられ、

表紙にはLonesome?（淋しくないの？）と大きく見出しが書かれたパンフレットになって、ひそかにキャンプのなかにばらまかれていった。彼女たちを再組織する準備のひとつとして、売春業者が通訳くずれなんかと結びついて、こんなかたちで「組合」のなかにはいってきていることを、彼女たちは知らなかった。働いた金で買った新しいダブルベッドや、畳の上にじかに脱いだハイヒールや、自分の名前が米語でタイプされたパンフレットなどを眺めていると、メリーは一種の誇らしさを感じた。やがてパンフレットには彼女たちの写真までが貼りだされるようになった。

アメリカ兵たちは、ジープに乗ったり、リンタク屋に案内されたりしてメリーの部屋をたずねてきた。なじみの兵隊が一人で一晩中遊んでゆくこともあり、見知らぬ兵隊が四五人でやってきて裸おどりやサディスティックな行為を強要したあげく、続けざまに情交を迫ることもあった。あまりのしつこさに彼女が怒ったりすると、「お前がいやならほかのムスメのところへゆく。お前に金は払わねえぜ」と兵隊はおどかすのであった。あきらめた彼女は兵隊の言うなりになって、鞭で打たれたり兵隊たちの前で自慰したりすることも、憶面なくやるようになった。

彼女は、朝は十一時すぎまでねていた。一時か二時ごろ、朝と昼の食事をいっしょにして、それから仲間のところをたずねたり、休みの兵隊と映画を見にいったりする。五時に

軽い夕食をとり、商売にそなえる。そして深夜の二時ごろまで性的な重労働がつづき、毎日同じ生活がくりかえされてゆく。最初、彼女は自分を強姦した兵隊をみつけだして殺してやろうと考えていたが、毎日の頽廃的な生活がいつかその意欲を失わせていった。四七年の冬、彼女は仲間にすすめられて二の腕にSapporo Merryの刺青をし、そのおかげでたくさんの与太者と友達になった。（類似例三十八）

2　水戸たか子

水戸たか子（二十七・札幌）は四八年の五月、長いあいだの望みを達して愛人の義輔と結婚式をあげ、貧しいながらも幸福な毎日を送っていた。しかし義輔が仕事（保険会社員）の都合で度々長い出張をするのが、淋しいといえば淋しかった。

八月のある日（十九日か二十日とのことである?）、義輔は急ぎの社用で東京へ出張しなければならなくなったので、朝の急行（注・当時、空の便はまだなかった）で札幌を立った。「今度は十日ぐらいかかるよ。淋しいだろうけどがまんして待っていなさい」と夫は汽車の窓から言った。たか子は彼を送ったあと、映画を見て淋しく家（といっても間借り）へかえった。

四日目に夫からハガキが来て、「できるだけ早くかえるようにする。汽車のなかでアイスクリームをたべすぎたせいか、お腹がいたんで困る」――次の日にもまたハガキが来て、「お腹がいたい。君の顔を見ればすぐなおるのに……」と書いてあった。それから何日か消息がとだえ、少し心配になった彼女は会社へ電話をかけてみたが、「特に連絡はありませんが、予定通りおかえりになる筈です」というだけで、変ったことはきかれなかった。しかしその晩、彼女がひとり寝のベッドにうつらうつらしていたとき、一通の電報（注・当時は電話より電報のほうが多く使われていた）がとびこんできて彼女を愕然とさせた。

『ゴシュジンモウチョウエンニテニュウイン　フクマクエンノオソレアリ」ジュウタイ」スグコラレタシ」チャクジコクシラセ」トウキョウホンシャ』

彼女は泣きそうになりながら外出着に着換え、札幌駅にかけつけた。新婚旅行のときの記憶によれば、夜の九時か十時に函館行の急行がでる筈であった。しかし電車がなかなか来なかったり、彼女の腕時計がだいぶ遅れていたりしたために、駅についたとき、その急行は既にでてしまったあとであった。彼女はついに泣きだした。駅長室にはいって事情を話したけれども、どうなるわけのものでもなかった。彼女は一刻もはやく夫にあえることを念じながら、深夜の駅の待合室にじっとたちつくしていた。

二時間ほどすぎたころ、助役（?）が彼女に近づいてきてせかせかした口調で言った。

あなたでしたね。重態のご主人に逢いにゆかれるというのは。――ちょうどうまいことに、進駐軍専用列車が今出ます。乗せてくれるかどうかわからないが、わけを話してたのんでみてあげますから、いっしょにいらっしゃい。」そこで彼女は喜んで彼のあとからついていった。

三番ホーム（四番ホーム？）に白線のはいったぜいたくな車がとまっていた。助役（？）は最後尾の客車にはいっていってしきりと交渉している様子だったが、やがて満足そうに降りてくると、「乗せてくれるそうです。これは特別はやいからさっきの急行と同じくらいに函館へ着きますよ。今証明書をあげますから。」と言って薄い紙に一筆書き、判を押して渡してくれた。彼女はボーイにつれられて最後尾の車にはいり、そこの寝台に荷物をおろして、先ずこれでよかった、と思った。乗って二分もたたないうちに、特別列車はホームを離れ、快適にスピードを増しはじめた。

しかし、落着いてみると、その車の様子はすこし妙だった。非常に豪勢な内部で、ひとりずつのコンパートメントに仕切られ、彼女のコンパートメントはそのいちばん最後のだった（といっても、そのうしろにもまだ、椅子を並べた喫茶室みたいな場所があった）。彼女の前隣りのコンパートメントには日本の女が二人いるらしく、甲高い話しごえがしていた。彼女は最初「まるで映画で見た外国の汽車みたいだわ」と思い、しばらくして「それにしても、進駐軍専用列車に日本の女のひとが乗っているのはおかしいな」と思い、最後に「でもあたしだって日本人なんだから、前隣りの部屋にいるひともやっぱり何か事情があって特別に乗せてもらったんだろう」と思った。そう考えると、ちょっと前隣りの部屋をのぞいてみたいような気がしてきたので、彼女はドアをあけて、そっと廊下へでてみた。

前隣りの部屋の廊下向きの窓にはカーテンがかかっていなかったので、中の様子がよくみえた。髪を茶色に染めた二人の日本の女がベッドに腰かけ、煙草をふかしながらしきりに喋りあっていた。その前の部屋の窓には桃色のカーテンがかかっていたが、なかで男女の米語の話しごえがした。またその前の部屋にはカーテンが半分だけ引かれてあって、そのかげでアメリカ兵とパジャマを着た日本の女とが接吻しているのがみえた！

彼女はさらにドアをあけて、一つ前の車輛へはいってみた。そこには喫茶室のような場所はなく、コンパートメントだけがずっと続いて並んでいた。どの部屋にもアメリカ兵と日本の女がいて、笑いながらさかんにくすぐりあっているのだった。その前の車輛も、またその前の車輛もそうだった。自分の部屋の方へもどりながら、彼女は何か言いあらわすことのできない不安と嫌悪を感じた。

自分の部屋にはいろうとしたとき、前隣りの部屋の窓から髪を茶色に染めた女が首を出して、「フウ？　ユウ？　（あんただれさ？）」ときいた。それからもうひとりの女が首をだし

て何かわけのわからない米語をわめいた。彼女が「何でしょう?」ときかえすと、二人の女は顔を見合わせ、嘲けるようにわらって窓をしめてしまった。

彼女は部屋にはいり、ドアにそなえつけの鍵をおろし、カーテンをしめた。「あのひとたちは進駐軍の奥さんなんだろうか? それともパンパンだろうか?」彼女はそんなことを考え、はやく夫のところへ行きたいという焦りと、ひどい汽車に乗ってしまったという後悔とをかわるがわる感じた。

列車は凄じいスピードで走っているらしかった。どの駅にもまったくとまらず、小樽にさえもとまらなかった。彼女は外向きの窓をあけて、港の燈が矢のようにうしろへ過ぎ去ってゆくのを不安な気持で眺めた。

そのとき、ドアを激しくノックする者があった。警戒して「どなた?」と誰何すると、「ボーイでございます」という返事がきこえた。彼女はやや安心して、しかし何の用だろうと思いながらドアをあけた。と、彼女は思わず息を呑んだ。

そこには三人の男がいた。ひとりは若い日本人のボーイで、哀願するような、許しを乞うような眼差しを彼女の方へ投げていた。何ということだろう! ボーイは両腕をさかさにねじあげられ、そのひじのあたりをシャツ一枚のアメリカ兵が片手で強くつかまえているではないか! そのアメリカ兵はもう一方の手で大型の拳銃をにぎり、それをボーイの

背に押しあてていた。その横には、パジャマの上から軍服の上着をひっかけたもうひとりのアメリカ兵が、ぞっとするような笑いをうかべて彼女をみつめていた。彼女がドアをしめようとする前に、そのアメリカ兵は一歩ふみだして部屋の中へはいってきた。

拳銃を持った方が「カムオン!」と叫んでボーイを蹴ると、ボーイは苦しそうな声で彼女にいった。「この兵隊さんたちが……奥さんをこの列車にのせるように取計ってやったのはわれわれだから奥さんにお礼をいってもらいたいと……いうのです。この通り命令で仕方なしにやったんです……お許しください……。」いいおわると同時に兵隊はボーイを喫茶室の方へ蹴とばした。そしてその拳銃で彼女の胸へねらいをつけ、本気だか冗談だかわからないような声で、「トウレイト! (もうだめだよ!)」といった。彼は拳銃をつきつけたまま、パジャマの兵隊を押すようにして部屋へはいり、ゆっくりした動作でドアをしめ、鍵をおろした。

彼女は突然とびのいて外向きの窓に手をかけ、いっぱいにあけた。とびおりようと思ったのだ。列車は怖しいいきおいで走っていた。しかしもしアメリカ兵に抱きすくめられさえしなかったら、きっととびおりていたであろう。彼女は前の方にまわってきた毛むくじゃらの腕に嚙みつき、胸も裂けるような悲鳴をあげた。そしてとじられた窓を脚で蹴破ろうとしながら、せいいっぱいの大声で夫の名をよんだ。

パジャマの兵隊は彼女をベッドの上に押し倒した。瞬間、自由になった片手で彼女は彼の眼を突いた。彼が「ウエ！」というような声をだして顔を掩ったすきに彼女は半身をおこしたが、それ以上の抵抗は不可能となった。もうひとりの兵隊が彼女の胸に拳銃を押しあてたからである。

パジャマの兵隊（の眼あるいは瞼から血が流れだしていた）が彼女の服を剝ぎとり、ブラジャーをはずし、ズロースを引き裂き、凌辱をとげるあいだ、もうひとりの兵隊は彼女に拳銃を擬しつづけていた。その兵隊が凌辱をとげるあいだ、パジャマの兵隊が同じように彼女に拳銃を擬しつづけていた。彼女ははじめのうちこそかつと眼をみひらいて相手をにらみつけていたが、パジャマの兵隊がもういちど襲いかかってきたころには、ぐったりとなってしくしく泣くばかりだった。やがて二人の兵隊は「バカヤロー、クタバレ、バカヤロー！」とののしって彼女の顔の上に唾を吐きかけると、何かわめきながら立ち去っていった。

彼女は長いあいだ泣いていた。それから服を着、靴をはき直すと、ふらふらと廊下へでていった。どのコンパートメントからも酒と煙草のにおいが洩れ、女たちの嬌声がきこえてきた。彼女は喫茶室を通り、最後尾のドアをあけ、デッキに立った。デッキのドアをあけると、ちょうど高い崖の上を走っているところだった。彼女はぼんやりとステップに降

り、それから暗い谷底めがけて、夫の名をよびながら身をおどらせた……。

と思ったとき、彼女は誰かに抱きとめられていた。しばらくもみあったあげく、彼女はまたデッキの上まで引きずりあげられた。

彼女を抱きとめたのは、さっきの日本人のボーイであった。もうひとり、別のボーイもそばにいた。彼等は一生けんめい彼女を慰め、ともかく部屋へ連れかえって、死ねば元も子もなくなるから、死ぬのだけはよした方がいい、とくどいほど忠告した。彼等は、函館へ着いたら知らせるから、それまでは内から鍵をかけて、どんなことがあってもあけてはいけない、といって出ていった。

彼女は窓をあけてみたが、もう死ぬ気にはなれそうもなかった。果しなくひろがった夜の荒野を眺めながら、彼女はまた泣いた。

……

函館で、特別列車は前の急行列車に追いついた。彼女は連絡船に乗り、青森からさらに朝の急行に乗り継いで、その日の夜おそく上野へ着くことができた。電報を打っておいたので、夫の同僚が迎えにきていた。彼女はその男といっしょにタクシーで病院へとんだ。

夫はかなり危険な状態だった。彼女はすぐに死物狂いの看病をはじめ、何もすることが

ないときはベッドのそばに脆いて、夫の肩のところに顔を埋めていた。夫の意識はあまり確かでなかった。しかし看病の甲斐があったものか、彼女が着いてから三日目に、症状は危機を脱し、医者もはじめて安心したように、生命の危険がなくなったことを告げた。

義輔はなお二三週間病院から出られなかった。彼は妻の優しい看護に感謝したが、やがて病人特有の鋭い感で、彼女のちょっとしたそぶり――「おなおりになってよかったわ、あたし嬉しい」といったかと思うと急に悲しそうに泣きだしたり、しきりに毒薬のことをききたがったり、夜中におびえてうわ言をいったり、ふだんのつつましさに似合わず新しい服を買いたがったりする態度に、だんだん不審を抱くようになってきた。「何かあったのか？」ときいても彼女はただ黙って首を横にふるだけだった。しつこく問いつめるとわっと激しく泣きだした。何か怖しいことがあったにちがいない、と彼は思った。

彼が事の真相をはっきり知ることができたのは、今日退院しようという日の前日の午後であった。退院が確定したのはその日の朝だったが、医者がそれを彼に言い渡している最中、彼女は何げなく部屋の外へでてゆき、それきり行方不明になってしまった。彼は何か不吉な予感をおぼえ、警察に電話して妻を探してくれるようにたのんだ。

彼女は病院を出たとき、看護婦の眼を盗んで薬局から持ちだしたヴェロナァル（睡眠薬）の小瓶をポケットに入れていた。東京へ来たのははじめてだったが、彼女は行きあたりば

ったりに歩き、水道橋近くのI旅館に部屋をとった。彼女は所持の手帳に事件のいちぶしじゅうを明細に書き、それを半紙で厳重にくるみ、表に「遺書――愛するあなたへ――」と記し、さらに自分が死んだらこれをすぐ夫のところへとどけてくれるように、病院の住所と夫の名をそばに列ねて、それをまたハンカチーフで包んでスカートのかくしにしまった。午前十時半ごろ、彼女は服を着たまま小瓶のヴェロナァルを一息にのみ、畳の上に昏倒した。

十二時半ごろ、女中が昼食の用意をどうするかきくために二階へあがってきて、彼女がうめきながら睡っているのを発見した。ゆりおこしてもおきないので、すぐ警察へ知らせ、警察から係官と医員がかけつけた。手当の最中、スカートから遺書がでてきたので、ただちに義輔に連絡することができた。彼が病後のふらふらした体で彼女を収容したK病院へかけつけたのは午後二時ごろであった。

彼はそこで彼女の遺書を読んだ。

……

彼女はそれから一昼夜をねむりつづけた。しかし発見がはやかったため、どうやら生命に別状はなく翌日の夕方おそくぼんやりと眼をひらいた。自分を抱きしめているのが夫だ

ったことを知ったとき、彼女は最初逃げようとし、そして大声で泣きだした。二人は抱きあったままわあわあ泣いた。しかし彼等二人の本当の苦しみは、実はこのときから始まったのだといえよう。二人で札幌へかえったのちも、義輔はそれまでと全く違った深い愛情を妻にたいして感じる反面、ときおりたえきれなくなって彼女をなぐったりねちねち責めたてたりした。

彼女はそのたびに自殺の誘惑にとらえられ、あるいはやけになって堕落しようといくど考えたかしれない。実際、彼女はその後二度も素薬をのみ（いちどはアドルム、いちどはヴェロナァル）、二度ともふしぎに早く発見されたので死にきれなかった。またいちどはたったひとりでバーにでかけ、浴びるように酒をのんだあげく、輿太者やアメリカ兵たちに強姦されようとしたが、このときも運よく北海道大学の学生五六人が近くを通りかかって危いところを救われることができた。（このときは学生対アメリカ兵の大乱闘がおこり、MPがかけつけて学生三人を拉し去ったという。）

けれども、結局二人の愛情と信頼が、勝利を得たのであった。そして二人の愛情と信頼をして勝利を得さしめたものは、二人が二人きりの狭いしかし深刻な悩みを通じてつかんだ認識の変化――いいかえるなら、その悩みや苦しみをもっと広くさまざまな方向にむけかえること――であった。義輔は妻の上に加えられた残虐きわまりない事実を、運が悪かったからだとか、一種の天災のようなものだったとか考える消極的な考え方をあらためた。自分たちがそのことでクヨクヨ考えこみ、その悩みのなかにとじこもってしまうならば、問題は決して解決されず、妻のような危機に立たされる女性はますます多くなるばかりだろう。日本人は――ことに日本の男は、もし日本の女性を真に愛するならば、彼女たちを愛と団結と正義の力によって暴逆な魔手から守りぬかなければならない！　そして、すでに魔手にけがされた女性たち――ことにそれが原因で堕落していった女性たちを、いっそう強い愛と勇気とをもって、ふたたび自分たちの手にひきもどし、優しく支えて立ち直らせなければならない！　妻を、恋人を、姉妹を、娘を、母を、アメリカ兵のけがれた手から守りぬこう！　奪いかえそう！　全日本の男性よ、そのための強い同盟を結ぼう！――義輔の思想はこんなふうに次第に積極的な方向へ移ってゆくようになった。また、たか子の考えかたも、どうせあんなにされたんだからひと思いに死んでしまおうとか、もうどうしたって夫に愛されるわけにはゆかないんだからいっそうんと堕落してやれとかいった卑怯な（彼女の言葉をそのまま引用する――五島）考え方から、自分たちの貞操を守るための全日本の女性の団結を――パンパンとよばれてるひとたちをも含めた強い団結を作るために少しでも役に立とう、という積極的なものに変化しはじめていった。夫と妻が真に愛しあっていさえすれば、もしアメリカ兵に妻が辱しめられたとしても、その苦しみは二人

が分担することによって必ず克服される――しかもそれはただ克服されるだけでなく、その二人の周囲に、そしてやがては全日本に、犯された妻たちとその夫たちとを核とした、ひとびとの強い団結をかたちづくってゆくだろう、と二人は考えるようになった。

（この記録は水戸たか子・義輔夫妻の直接の談話によったものである。たか子の遺書を収録したかったがそれはすでに焼却済みとのことであった。類似例は残念ながら――あるいは幸いにも――わたしの手もとにはひとつもないが、他にもっとありそうな気もする。純粋な暴行の記録からは少しはみでているが、夫妻の御希望もあり、また暴行によって崩れてゆく女性たちの多いなかにあって、きわめて興味のあるケースとも考えたので、他の記録と量の上でつりあいがとれないのを承知の上で、あえて談話内容の全部を書くことにした。夫妻およびF氏に厚く御礼申し上げる。なお、夫妻のご意思を尊重し、とくに仮名を用い、病院の住所等にもふれないでおいた。以上附記する次第である。――五島）

3　樋口冴子

樋口冴子（二十二）は、四八年八月、着のみ着のままで故郷の仙台へ満洲から引揚げてきた。両親と姉妹は満洲で死んだので、故郷といっても遠い親戚が一軒あるだけにすぎない。悲しみを忘れて働こうとしたが、パーマもかけず人並の服装もせず微笑もしなかったために――少くとも彼女にはこれらが原因であるように思われた――どこでもやとってはくれなかった。親戚の家も子供がたくさんいて貧しかったので、長く世話になっているわけにはゆかず、彼女は追いたてられるようにしてそこを出、駅のベンチや防空壕や地下道で何日か暮らした。地下道から十分ほど歩いたところに米軍のキャンプがあり、キャンプの裏に大きなごみ捨て場があったので、彼女は毎日そこから古いパンやカンヅメの残りなどをひろってたべた。

ある日、ごみ捨て場の向うのバリケードのそばにハムの切れっぱしがころがっているのをみつけ、ふらふら近よっていくと、突然横から重いものでなぐられ、彼女は悲鳴をあげてごみの中に倒れた。「ささま、盗もうとしたな、進駐軍のものを盗むと銃殺だぞ」銃口が背中にあてられた。彼女が泣いて謝ると「じゃ許してやるが、そのかわりささまの住んでいるところをいえ、嘘つくと殺す」「地下道です」――「間違いないな」――「間違いありません」――なおも銃の台尻で五六回なぐったあと、その日本人のガードはやっと彼女を釈放した。

その晩、彼女はどこかへ逃げだそうと思ったが、体じゅうが痛んで歩けないので、いつものように地下道の入口でねていた。街はネオンの光に輝き、近くのガード下や橋の上には派手な姿をした街娼たちが点々と立っていた。虐殺された両親や姉弟のことを思いだし

て泣きだしたとき、「ヘーイヒヤー！」という声がして肩をつかまえられた。見ると例の日本人のガードがアロハシャツを着てにやにや笑っており、その向うから下品な顔をした四人のアメリカ兵が近づいてくるのだった。と、たちまち、彼女はそのうちの二人に抱きあげられ、厚い掌で口をふさがれてしまった。兵隊たちは大声で笑い、彼女を地下道の暗い片隅へ運んでゆき、コンクリートの上にねかせ、そこで彼女を犯した。……彼等が立ち去ったとき、彼女は裸のまま、そばに投げられた金やチョコレートをひろおうともしないで、虚ろな眼をぼんやりとみひらいていた。

（前にもこんなことがあった。あれは奉天でだったろうか？　母と姉の死体のまえで私が辱しめられたとき……それから国境の近くで野宿したとき……どこでも同じことだ……私はもうあのとき死んだんだ……）というようなことを彼女は考えていた。

はっとしてあたりを見まわしたとき、彼女の前には街娼や興太者が十人ほど腕まくりをして立っていた。「ヘーイ、ユウ、仁義も通さねえで縄張り荒しやがんのかよ！」……彼女が黙っていると、ひとりの街娼がそばに散らばった金をとりあげ、「へん、モグリで稼ごうたってそうは問屋がおろさねえや」といい、腰からベルトをひきぬいて彼女の恥部をなぐった。続いて大勢がなぐりはじめた。「仁義も知らねえんなら、一丁ヤキ入れてやらあ」いったん起きあがった彼女は、体をひきずるようにして三歩ばかり逃げ、そして全身血だらけになってそこへ倒れた。

こうして彼女はヤキ入れをすませ、街娼の群れに加わることになった。ガードの銃とヤキ入れのため、頬や背中に大きなあざがいくつもでき、いつまでもそれが消えなかったので、彼女は仲間からもアメリカ兵からもステンプ（あざ）というあだ名でよばれた。（類似例一四）

4　アヤ、ブロンディ・テイ

アヤ（年齢と本名はわからない・東京）はほかの仲間たちといっしょに、有楽町・日比谷公園・皇居前広場いったいをなわばりにして盛んにアメリカ兵をあさった。夏のあいだは公園の樹蔭や草原などで青カンをやり、焼ビルで夜を明かすといった毎日をくりかえしたが、だんだん寒くなってきたし、それに焼ビルからは警官に追いだされたので、二三人ずつ共同で民家の部屋を借りることにした。アヤはブロンディ・テイといっしょにあるバーの裏二階を借りた。四八年（月日不明）のことである。

午後九時、彼女たち「レイ・グループ」のメンバー二十何人かは、申し合せの場所（月・

水曜は皇居前広場、火木曜は東京駅か日比谷公園、金曜は不定、土・日曜は有楽町）に集り、アネゴであるレイ（年齢・本名・出身地全部わからない）の点呼を受ける。客はアメリカ兵ならいちばんいいが、アメリカ兵なみの金を持っていれば日本人だってかまわなかった。各自の責任額は一晩四百円、これだけはたとえあぶれた晩でも、必ずレイの手もとにとどけなければならない。

レイは集った金の九割を情夫である暴力団E組のボスEに渡し、Eはその代償として部下の暴力団員に彼女たちを保護させる。レイ・グループのなわばりはY・L（ヤンキーズ・ラヴァーズ）や小桜団やラク町組やその他中小の街娼団体のなわばりと複雑に入り交っており、時にはなわばり争いから街娼どうしの凄じい喧嘩がおこることもあった。それがあとをひくと、各々の街娼団体を保護する暴力団どうしの果しあいに拡大し、各々のボスの支配下にある歓楽業者たちの対立をひきおこし、さらに各々のボスの背後にある銀行どうしの暗闘にまでつながっていくことさえあった……。

アヤは美しかった——そのため美貌で評判の下士官が半月ほどスペシャル・メイドに囲ってくれたこともある——ので、あぶれる心配はまずなかったが、でも黙って立っていれば黙って売れてゆくというほど客の数は多くなかった。都心に立つ街娼全部を二千人と見て、近郊の基地からわざわざやってくるアメリカ兵は一晩三四千人ぐらいだったろうか。

雨がふるウィークディなどは、彼女たちの方から近郊の基地へでかけてゆき、その土地のホテルへ客をくわえこむこともあった。

そんなときには、その土地をなわばりにしている街娼群や、それにつながる暴力団との衝突がおこったりするので、E組の興太者たちが彼女たちを護衛していくわけである。それがきっかけで暴力団員と彼女たちとのあいだにはいつのまにか多角的な情交関係が結ばれるようになっていた。

アヤとブロンディ・テイにもたがいに共通する二人の興太者がヒモについた。彼等が客をつれてくるようになったので、彼女たちが街角に立つ必要はなくなったが、そのかわり稼ぎの大半はヒモたちにしぼりとられた。幸福だった少女時代を、二人は他人のことのように思いだしたりするのだった。未来についてのいっさいの考え——たとえば希望とか予定とかいうようなものは、彼女たちの心のなかにはもうなくなってしまっていた。

（類似例二〇）

5　市川順子

市川順子（二十一・東京）も、横須賀・横浜・川崎・立川と、さまざまな泡ぶく会社で

働いているうち、いつとはなしに街娼に転落していた。彼女自身、いつまでカタギでいつから街娼になったのか思いだせないほどであった。美しいというのではなかったが、異常に肉感的な彼女は、泡ぶく会社に勤めれば重役や課長や同僚の男にねらわれ、家にいれば近所の青年や義兄や養父にねらわれた。最後に四七年のあるとき、勤めた立川の商店がアメリカ兵用のギフトショップだったことが、彼女の場合には決定的な転落の契機になった。

彼女は貧しく、買いたいものが沢山あった。しかしそればかりが街娼になった理由ではない。彼女は愛情のない複雑な家庭を憎悪し、女学校時代の友人たちが、ただ金があるというだけのことで、女子大生になったりいい勤め口を得たり盛大な式をあげて結婚したり、立派な服装をしてぶらぶら遊んでいられたりするのを憎悪した。いつか何とかしてそんな友達を見かえしてやろうと考えていた。彼女はまた、街にあふれ、勤めている店にやってくるアメリカ兵がみんな金持であるのに驚き、羨しく思い、彼等の肉体や態度や言葉に、吸いよせられるような好奇心を感じた。

彼女は店先で、深い心もなく兵隊に接吻を許した。そのときが転落のはじめだったかもしれない。ハンサムな兵隊と歩いているうち、ホテルに連れこまれて情交した。そのときがはじまりだったかもしれない。……やがて彼女は知りあいの街娼と二人で、もと海軍少佐の未亡人の家の一室を借り、兵隊たちをそこへひっぱりこむようになった。小学校五年

の女の子をかかえた未亡人は掃除婦をしたりして働いていたが、二人が部屋代を払うようになってからはそれでどうやらたべていけた。しかし真赤なパジャマを着て毎夜兵隊とたわむれている二人を見ると、未亡人も少しずつ動揺しだした。ある晩兵隊が三人ウイスキーをのんでやってきたとき、彼等はいやがる未亡人をつかまえて無理にコップ半分ほどのウイスキーをのませ、ぐったりした彼女を二人の娼婦と並べて同じようにもてあそんだ。兵隊がかえり、未亡人が激しく泣いたとき、順子はぺちゃぺちゃ喋って慰めてやった。「奥さん、今さら泣いたって仕様がないじゃないの。考えてみればあたしたちだって満更悪い商売じゃないわよ。ふつうの日本人より格が上よ。奥さんもこれからうんと愉快にすごしたらいいじゃないの」——そこでとうとう未亡人も彼女たちの仲間にひっぱりこまれた。

(類似例四三)

6　草間ゆりえ

草間ゆりえ（二十二・小倉市）はキャンプ・コクラに勤めているうち、四八年の秋（十月?）、弾薬庫のそばの草原でスミスという中年の兵隊に犯された。彼女はふだんから彼に好意を持っていたので、完全な意味の強姦ではない。「あなたの妻になりたい」と泣きながら訴

えた彼女に、「国に妻と子供がいるからだめだ。しかし帰国するまでならお前とつきあってもいい」と彼は答えた。

彼女はいったん失望したが、すぐ、それでは独身の兵隊だったら関係をつければ妻にしてくれるにちがいない、と考え、スミスと遊びまわる一方、結婚してくれそうな独身の兵隊を物色していた。もの欲しそうな彼女の態度につけこんで、いろんな兵隊が情交をもとめ、彼女はそれに応じた。彼女の性質がとくに娼婦的だったというわけではない。キャンプに勤める一部の日本ムスメのあいだには、「GIと結婚したかったら先づすべてを許さなければならない。それがアメリカ式のやり方なんだ」というような妙な迷信が強くひろまっていたからである。

ある夜、スミスといっしょに駅前を歩いていたところ、MPと警官がふいにまわりをとりまき、彼女を中型トラックの上にひきずりあげた。彼女は泣きわめいて助けを求めたが、「これは君のスペシャル・メイドか?」とMPにきかれたスミスは大げさに肩をすくめてみせ、「とんでもない、パンパンの中でも下等な方だよ」と答えた。

警察では、いっしょにつかまった街娼たちはもうみんな慣れつこになっていて、若い警官とふざけあったりしていた。ゆりえだけが大騒ぎして、手錠をはめられたり裸にされたりした。彼女は笑っている警官たちの前でぽろぽろ涙をこぼしながら、「いつかはGIと結婚して見かえしてやる。おぼえてろ」とヒステリックに叫んだ。

しかし、彼女はそれから次々に三人の兵隊と同棲したけれども、とうとう一人も結婚してはくれなかった。四九年の八月に彼女は男の混血児を生み、子供がいては結婚する相手もみつからないだろうと考えて、はるばる大磯のエリザベス・サンダース・ホームまでゆき、門のそばへ子供を置いて逃げた。それから横浜で三流どころのダンサーをしながら、結婚してくれそうなアメリカ兵をさがしたが、無駄だった。怒りと絶望から、彼女はしだいに本ものの街娼に落ちていった。四九年三月の寒い深夜、ホテルからでて相手の兵隊と別れたあと、ひとりで海岸通りを歩いていると、またMPにつかまった。だが彼女はもう騒がなかった。(類似例一八)

7　熊谷友子

熊谷友子(二十六・大阪)がつかまったときの狩りこみは他に例がないほど大規模なものだった。

それは四九年の夏(多分七月十四日頃の夜)だったが、イタミ司令部の命令によって出動したMPの数は一個中隊を越え、それに三百名以上の日本人警官が参加した。朝の三時、

先ず徒歩の警官隊が豊中・伊丹・西宮へかけての数カ所の街娼密集地帯を包囲し、恰もその警官隊を督戦するかのようにMPをのせた九十台のジープが縦横に歩りまわった。どこへも逃げだせないのをたしかめてから、警官隊は焼ビルや地下道やバラックや路上の街娼たちにいっせいに襲いかかった。

アメリカ兵と酒宴中の女がいた。アメリカ兵と情交中の女がいた。抱きあってねむっているのがいた。泣きわめく混血児に乳をやっているのがいた。興太者に抱かれているのがいた。病気の手当をしているのもいた。警官たちは怒鳴ったり笑ったりしながら必要以上に荒々しく彼女たちをひったて、戸外へひと塊りに並べ、トラックへつめこんだ。スカートをはいた者やパジャマを着ている者もいたが、大部分はほとんど裸であった。反抗する者は裸の胸や尻を警棒でなぐられた。そして彼女たちのそんな姿を、ジープのヘッドライトで照らしつけながら、それまで彼女たちを抱いていたアメリカ兵たちが、MPといっしょになってげらげら笑いながら眺めていた。

彼女たちは留置場に入れられ、「調べ」られた。ある警官は、病気にかかっているかどうか調べるといってひとりひとりの性器に指をつっこんだ。ある警官は「証拠品」だといってズロースを取り上げたままかえさなかったし、ある警官は彼女たちから奪ったチューインガムや外国煙草でポケットを醜くくふくらませていた。彼女たちはおとなしくしていたが、

街娼と間違えられてつかまった一般の女たちは口惜しそうに泣きながら抗議していた。

熊谷友子はキャンプで働いていたのだけれども、兵隊に体を売ったことはなかった。その夜は偶然仕事がおそくなったので終電車を逃がしてしまい、歩いてかえる途中この災難にあったのである。彼女は大暴れに暴れて警官のひとりに噛みついたりした。警官は彼女を真裸にし、両足をひらいて動けぬようにしばり、「パンパンとそうでない女とどこが違うか調べてやる」とわめいた。MPが何人かそばで見ていたが、これは腹をかかえて笑っていた。つつきまわしたり、擦ったり、覗いたりしてやっと「調べ」が済んだとき、彼女は涙もでない眼を半ばみひらいたまま気絶していた。

二日ほど「調べ」をくりかえしたあげく、警察は罹病者だけを病院へ送り、そのほかの者は、つかまえられたときと同様、何の理由も告げられずに釈放された。彼女たちはまたなわばりへかえり、商売にとりかかった。釈放されてから四日目、友子はキャンプのなかで青酸加里をのんで死んだ。（類似例一五）

第二章

不完全街娼形態の崩壊・性的需給均衡・暴力団との関係・ふたたび性病まんえんす・残酷な狩りこみ・アルバイト洋娼・戦争前夜

一九四八年の七月で在日米軍の大量帰国は一応終止符がうたれた。それに伴ってそれまで一カ月平均二千五百～三千人の線を上下していたスペシャル・メイドから街娼へ転落する女性の数は一挙に極端な減少を――一カ月三百～五百人程度までの減少を示すにいたった。したがってこれからあとのスペシャル・メイド転落者は、在日米軍が常時十数万の一定した勢力（これだけあれば日本の占領政策に支障はなかろうとGHQは考えまた事実支障はなかった）を持続するのと平行して、自分たちより先輩のスペシャル・メイド転落者が更生・死亡・性病の悪化・きわめて稀におこなわれるスペシャル・メイドへの復帰・などの理由で洋娼群を離脱していくあとを補充するようなかたちでしか洋娼群に加わることができなくなる。つまり洋娼群の増大に積極的な役割を果すことができなくなるのである。

しかしあながちスペシャル・メイド転落者ばかりでなく、これから以後ずっと――少くともこれから以後当分のあいだは、米軍の数がいちじるしい増減を示さないため、洋娼全体もまたこうした自己補充的・単純再生産的なかたちをとって存続していくほかはなかった。

もし彼女たちに対する米軍の性的需要がもっと強くかつ多かったら、彼女たちの数はためらうことなく更に増加したであろう。なぜなら彼女たちを生みだす基盤――現実の生活のみじめさ、ムスメたちの解放へのねがい・アメリカ兵による強姦・キャンプを中心とする風紀の頽廃等々――は、米軍が大量に帰国したのちも、いやムスメたちの心をそそのかしたままで大量に帰国してしまったからこそ、より広く深く拡大していたからである。また反対に、米軍に対する彼女たちの数の比率――性的供給が多すぎたとしたら、彼女たちはただちに減少したであろう。なぜなら慰安所のオフ・リミッツ以来、全国的に和娼窟を再建、強化しはじめていた大業者が彼女たちを吸収しただろうし、そうでなくとも彼女たちを生みだす基盤と同様の基盤にうごめいていた結婚できない日本の若い男性たちが、彼女たちを見逃しておく筈はなかったろうからである。にも拘らず彼女たちの数がいちじるしい増減を示さなかったのは、彼女たちの性的供給と米軍の性的需要とが――つまり米軍の数と彼女たちの数の比率が、この時期には一種の均衡状態を保ち、しばらくそれが破れなかったことによるものである。四八年から四九年にかけての米軍の数は平均して約十五

万余人、洋娼の数は平均して六万二、三千人。だから米軍と洋娼との性的需給関係に均衡を保たせた両者の数の比率は、米軍二・五に対して洋娼一の割合だったことになる。しかしこの需給均衡は彼女たちの発生基盤のとどまることなき拡大によって、実際には大きく破れることがなかったにせよ、たえず破られそうな危険にさらされていたから、その意味では決して安定した均衡ではなかった。

もしも彼女たちの売春の形態が、前章にのべたような組織なく搾取なきてんでばらばらの個人売春のかたち——不完全街娼形態をいつまでも維持していたとしたら、この均衡はとっくに破れさっていたであろう。不完全街娼形態は街娼の発生と営業に何の拘束も加えなかったからである。スペシャル・メイド転落者が激減したとはいえ、キャンプ数の増加・歓楽街の復興・外地引揚者の増大等々の原因から導きだされる転落者たちが、たちまち不完全街娼形態をとる洋娼群へ殺倒していったにちがいない。

ところが、幸か不幸か、不完全街娼形態はすでに完全街娼形態へ移行しつつあった。完全街娼形態なるものをもういちど正確に定義するなら、それは大業者・ボス——暴力団——アネゴの支配下に統卒された、苛酷な搾取を伴う、地域ごとに組織された街娼形態のことである。このように組織された街娼グループのメンバーになるためには、言語に絶した私刑を受けなければならない。組織の外にあって勝手に売春をおこなう女性に対しても同様

の私刑がおこなわれる。こうした私刑が暴力団から輸入されたヤキ入れの習慣と彼女たちのインフェリオリティ・コムプレックスとの結合から出発したものであることはいうまでもあるまいが、彼女たちの意識すると否とに拘らず、それは組織された街娼グループ以外の街娼たち——不完全街娼形態を守ろうとする街娼たちの息の根をとめる役割を果したのであった。そこで組織された街娼グループに編入されるのを好まない街娼は、街娼をやめるか、和娼として赤線区域に没入するか、それとも何とかしてふたたびスペシャル・メイド又はスペシャル・メイド的な生活にもどるかしなければならなかったわけである。

完全街娼形態の基礎単位ともいうべきこうした街娼グループは、はじめ彼女たちどうしの淋しさと親愛感にもとづいて自然発生的にできあがってきたものらしい。てんでばらばらな個人売春をやっていた街娼たちが、地域や経歴や相手にする米軍部隊の区別などにしたがって徐々に結びついていったのであろう。だからグループの発生期には当然私刑もなかった。そのうち自然に各グループのなわばりがきめられてゆくにともない、いつのまにか暴力団の魔手が彼女たちにからみついていくという経過をたどるのである。

暴力団は、最初、彼女たちがアメリカ兵から時折、日本円の代りに受取るドルを円で買いとるというかたちで、彼女たちと経済的接触をもった。彼等はSPS（在留外人のための無制限輸入機関。これを通じて大量の闇物資が日本に流れこんだ。外人闇商はその闇物

資の代金である巨額の日本円をあらゆる方法でドルに換え、そのドル資金によってふたたびSPSから闇物資を流すということをくりかえした）の闇商人から円の供給を受け、それで街娼たちのドルを買いあげ、闇商人へかえすのだが、これによって闇商人と街娼の両方から上前をはねることができた。東京・横浜などの盛り場の街娼グループが最もはやく暴力団と結びつき、したがって最もはやく完全街娼形態を完成するにいたった原因のひとつは、この方面のアメリカ兵が他の土地よりもずっとひんぱんに、ドルを用いて肉体代金を支払っていたからである。

そのうち、ある街娼グループが他の街娼グループとなわばりを争ったり、金を払わないアメリカ兵をとっちめたりする必要がおこってくるにつれて、暴力団はもはや彼女たちにとって欠くべからざるものとなってしまい、さらに暴力団が組織的なポン引団として活躍しはじめる頃には、暴力団から離れた街娼グループ又は街娼個人は街娼としての存在を否定され、生きてゆくことができないまでになってしまった。

このような条件のもとでの、暴力団のボスによる街娼の搾取はきわめて容易である。はじめは稼ぎ高の一割～三割だった搾取が次第に多くなり、一九五〇年にはいってからはついに八割～九割にまで達するようになった。この中にはボスによって課せられる税金のみならず、個々の街娼が個々の暴力団員によってしぼりとられるポン引料・ヒモ料も含まれ

ている。街娼たちにとって、搾取から逃れる道はなかった。街娼をやめて、当時着実に拡大しつつあったキャバレー街に移ろうとしても、そうしたキャバレー街の支配もやはり暴力団の兼業するところだったから。それに加えて、街娼グループの発生期にはあんなにも他の街娼から祝福された「街娼をやめる」ことさえも、今では街娼グループへ加入するときよりいっそう苛烈な私刑をもって報いられるようになっていたから――。この私刑によって、ボスは街娼の逃亡を防止し、搾取機構の安定を期したわけである。もし彼女たちが搾取から逃れうる道があったとすれば、それはたったひとつ、ボスの支配に反抗するための彼女たちの団結よりほかになかったのだが、彼女たちの団結は不幸にもボス支配に反抗するためのものではなく、かえってそれを容易にするための団結、もしくはそのために利用される性格の団結にすぎなかったのだ。

このようにして、完全街娼形態が、ある場所では完成しある場所では半ば完成しつつあったとき、しばらく前から彼女たちのあいだにまんえんしていた性病がいっそう猛威をふるいはじめてきた。病菌の勢いは暴力団員や兵隊との混乱した情交関係と、ペニシリンやスルファミン剤による素人療法のためにさらに強力なものとなった。それはかつての慰安所時代ほどひどくはなかったけれど、それでも最高率の部隊では三十九%、最低率の部隊

では二十四%、在日米軍全体を平均して二十六・六%という罹病率を示すにいたったのである。

四九年を中心としておこなわれた残虐きわまる街娼の狩りこみには、右の事情が大きく反映していた。それがあまりにも残虐、あまりにも非人道的であったためか、この時期の狩りこみについての公式の記録はほとんど残されていない。狩りこみはMPのみによっておこなわれた場合もあり、MPと日本の警察が協力した場合もあり、また日本の警察のみによっておこなわれた場合もあったが、残虐さの程度はどの場合も同じことであった。MPの残虐性はアメリカ兵一般が日本の女性一般を犬か猫のようにしか考えていないということのひとつの証拠として、また日本の警官の残虐性は彼等がいかに米軍に忠勤をはげんだかということのひとつの証拠として、ともに歴史に残る価値を持つものである。

MPや警察は、街娼であると否とを問わず、狩りこみ時間中狩りこみ区域にいあわせた日本の女性をひとり残らず留置場やVD病院にぶちこんだけれども、まるで事前にそういう約束がしてあったかのように、ボスや暴力団には一指もふれなかった。このことは、狩りこみがもっぱら性病検診のみを目的としておこなわれたこと、そして街娼たちの背後にある、あらゆる腐敗と悪徳と暴力に対してはかえってこれを助長するようなかたちをとったことを端的に示す。警察は彼女たちが性病に罹っていたことを「占領目的違反だ」とき

めつけはしたものの、彼女たちが売春していることについてはひとことも咎めなかった。彼女たちの売春を非難し、彼女たちに正しい職業を与えるようなことは、米兵の性欲の排泄を妨害するという意味で、それこそ重大な「占領目的違反行為」だったのだろう。

こうした完全街娼形態の完成と残虐な狩りこみへの恐怖のために、四九年から五〇年にかけて新しく街娼の仲間にはいる女性はほとんどあとを絶った。この時期には、少数のスペシャル・メイド又はスペシャル・メイド的女性をのぞいて、洋娼はほとんど街娼だったから、つまり新しく洋娼になる女性があとを絶ったということである。しかし洋娼を生みだす基盤——現実の生活のみじめさ・ムスメたちの解放へのねがい・モラルの混乱・アメリカ兵による強姦等々——はいぜんとして縮小されなかったから、その当然の結果として、街娼のような完全な娼婦でない娼婦、いわばアルバイトに洋娼をやるといった女性が増加してきた。

とくに各キャンプに勤めていた女性は、この時期にはほとんど全部がアルバイト洋娼と化しさってしまった。キャンプに勤めながら、一週に何夜か、あるいは土・日曜の夜だけ、特定または不特定のアメリカ兵にキャンプ内やホテルで肉体を売るわけである。(このうち特定の兵隊と関係を結んだ女性が、いわゆるオンリーで、あとで問題になる洋娼形態の前身なのだが、今はこの問題にはふれないことにする。)キャンプじゅうがアルバイト洋娼に満た

されたため、新しくキャンプに勤めた女性は、そうでなくとも当然アルバイト洋娼として取り扱われ、すべてアメリカ兵の暴行や誘惑にあって処女を失い、さらに強制検診の侮辱をたえしのばなければならなかった。アルバイト洋娼たちの存在は街娼グループと暴力団にも大きな脅威を与え、多数の街娼グループが「日本人相手にせず」というそれまでの鉄則を放棄しなければならなかったほどであった。

完全街娼形態という厳しい制限を一方で課せられながらも、さらにこのような潜在的なかたちで洋娼がふえてゆこうとしていたことは、洋娼を生みだす基盤がいかに大きくひろがってしまったかをわたしたちに教えてくれる。アメリカ兵による強姦はやまず、貧富の差はますます激しく、ムスメたちの虚栄心はますますふくれあがり、政治はますます事大主義と虚偽に満ちていった。――しかし、こうした情勢にも拘らず、なおこの時期までの――一九五〇年前半までの洋娼の問題は、それから以後の洋娼の問題にくらべて、より大きなものでも、より複雑なものでも、より全国的全国民的なものでもなかったのである。そして、この上なにか特殊な事態がおこらないかぎり、それがより大きな、より複雑な、より全国民的な問題にまで展開してゆくことは決してなかったにちがいない。あの特殊な事態さえおこらなかったならば――、あの忌わしい戦争がはじまりさえしなかったならば…。

第四部　朝鮮戦争の背後で

第一章

1、津田クニ・ミミ　2、福士礼子　3、Y・Lグループ
4、ハニイ　5、ヨコタの女性たち

一九五〇年六月二十五日午後三時五十分、占領軍向けラジオ（FEN）のけだるそうなジャズがぷっつり切れて、キーンというような雑音がはいってきた。そして三分ののち、ムスメを強姦したりバーの女を抱いたり、キャバレーでおどったりしていた日本じゅうのアメリカ兵の耳に、あの不吉な歴史的ニュースを伝えるアナウンサーのふるえ声が、突如としてとびこんできたのだった。

《……私用で外出中又は外泊中の米軍将兵全員に告げる。私用で外出中又は外泊中の米軍将兵全員に告げる。直ちに所属部隊に復帰せよ。直ちに所属部隊に復帰せよ。今朝七時、北鮮共産軍が朝鮮の三十八度線南方に大挙侵入した。在鮮友軍は彼等を迎えて目下激戦中である。予想されるあらゆる事態に対して待機するため、諸君は直ちに所属部隊に復帰せよ。直ちに所属部隊に復帰せよ。私用で外出中又は外泊中の米軍将兵全員に告げる……》

1　津田クニ・ミミ

津田クニ（二十四・兵庫県）は大阪の洋娼ホテル（といっても、三帖一間にベッドを入れた部屋を並べただけの、ベニヤ作りのバラック）で働いていた。彼女の前歴については、もと神戸で街娼の仲間にはいっているうち、ヒモの与太者に連れられてそのホテルへやってきたということのほか、くわしくは何もわからない。

ホテルには二十人ほどの女がいたが、大阪有数の暴力団Y組の幹部だという主人（大野某・五十？）とその子分十人に監視されていて、一日にオール・ナイト一人、ショート・タイム三人以上の客をとらなければ煙草の火でヤキを入れられた。クニの親友だったミミ

（二十・大阪・本名はわからない）などは、風邪をひいて三日寝込み、そのあいだ客をとらなかったというので、その三日間とそのあとさらに一日半、罰として食事も麻薬も与えられなかったほどである。

各部屋にそなえつけられた小さなラジオから開戦のニュースが流れだしたとき、彼女たちを抱いていたアメリカ兵たちはみんな蒼くなって、パンツもはかずにベッドからとびおりたり、近くの民家にむけて拳銃をぶっ放したりした。殺気立って彼等がかえっていったあと、彼女たちは一部屋に集って話しあおうと思ったが、主人の許しがないので各々の部屋にとじこもらなければならなかった。ドアを開けて主人と言い争っていたミミは、そのときほかの兵隊よりずっと遅れて帰ろうとしているクニのなじみのライルという黒人兵とクニが、クニの部屋の前で固い抱擁と接吻を交すのを見た。

それから兵隊たちはホテルに顔を見せなくなった。主人がほかの洋娼ホテルできいたところによると、二十五日以来部隊全部に厳重な外出禁止令がしかれ、それはいつ解除になるかわからない、ということだった。クニとミミはポン引（主人の子分）に監視されながら、わざわざキャンプまでかけていってみたが、カービン銃をふりまわして「へ、そんなに忘れられねえのか、ものが違うからな。……これ以上近づいたらぶっ放すぜ」とわめいている日本人ガードに手荒く追いはらわれただけだった。キャンプの門のあたりは集っ

てきた女たちでいっぱいだったが、ひとりも中にはいれた者はなかった。ときどき将校か誰かの奥さんが可愛いい金髪の子供なぞを連れて高級車で乗りつけて来、夫に面会するためキャンプの奥の方へ消えてゆくのを見ると、ミミは「ああ、自分たちはいくら威張ってもあの奥さんたちと対等じゃないんだ」とひどくみじめな気になり、ぽろぽろ涙がでてきた。あたりの女たちもたいてい泣いていた。クニは声をふりしぼって泣いた。

キャンプに勤めている日本ムスメたちは、露骨な軽蔑を示しながら、門の外にいる女たちを指さして冷笑したりスラングで罵ったりしている。クニとミミは絶望的な気持になって泣きながら帰った。

ところが、それから二週間ばかり経って、兵隊たちは夜おそくトラックをつらねてホテルへやってきた。明日朝鮮へゆかなければならないので、最後の思い出にリーヴ（大隊長）の与える非公式外泊許可）をもらってやってきたのだという。その夜の彼等のやけっぱちの騒ぎはすごかった。何人かの女はたまりかねて部屋から逃げだし、主人や子分たちになぐられて連れもどされた。

ただ、クニの部屋だけはひっそりしていた。ライルと二人でしんみりやっているのだろうと、隣室のミミは思った。が、ドアに錠をかけたまま、一時間たっても二時間たっても物音ひとつしないので、不安になり、声をかけてみた。返事はなかった。兵隊といっしょ

にドアをゆすぶってみたが、やっぱり返事はなかった。ラジオだけが鳴っていた。

「きっと心中したんだ！」ミミは蒼くなって主人や子分たちに知らせ、ドアを破ってとびこんでみると、床の上にクニのパジャマが脱ぎ捨ててあり、ふとんはもぬけのからだった。窓が開け放され、窓ワクから階下の軒まで太いロープが垂らしてあった。「ちきしょう。逃げやがったな！」主人は大声で叫び、ミミに「なぜもっとはやく知らせねえんだ？」と怒鳴った。しまった、とミミは思い、無事に逃げてくれればいいが、と祈りながらガクガクふるえていた。

黒人の兵隊たちはみんな、「黙って放っておけ」と主張した。しかし彼等が議論しているあいだに白人の下士官と主人が電話でキャンプに報らせたので、MPがジープをとばしてきてすぐに網を張った。いつも主人と一杯呑んでいる部長の指揮で、日本の警察も網を張った。子分たちはドスをふところにしのばせて夜の街に散っていった。

帰営時刻（午後十時）を三十分ほど過ぎたころ、Y組の配下であるタクシーの運転手が、それらしい二人づれを塚口まで送ったと報らせてきた。この情報は即刻、伊丹基地のMPに伝えられ、深夜の阪急電鉄や尼宝ドライブ・ウェイを走るタクシーはすべて臨検を受けた。おそらく神戸にいるクニの友達のところへ逃げるつもりだったらしく、二人は西の宮まで別のタクシーで行ったが、前方からMPのジープがやってくるのを認めてふたたびひ

きかえそうとしたらしい。

MPがそのタクシーに追いついたときには、二人はすでに暗闇でほかのタクシーに乗りかえたあとであった。巧みにMPのジープをまいて大阪へひきかえす途中、あまり速力をだしすぎたため、事情を知らない警官に停止命令を受けた。しかしライルが運転手に拳銃をつきつけていたので、タクシーはとまらず、警官のオートバイはサイレンを鳴らして追跡してきた。道ばたの交番から警察へ、警察からMP本部へその情報がとんで、MPのオートバイがタクシーを待ち受けていた。タクシーの中の二人を認めると同時にそのMPは自動拳銃を射ったが、あたらなかった。彼はオートバイで追跡しながら無線電話で本部に連絡し、尼ヶ崎の一キロばかり手前で二人がタクシーをおり、海岸の方へ……といいかけて電話を切った。ライルが拳銃でそのMPを倒したのである。

二十人のMPが五台のジープに分乗して現地に向い、まず重傷のMPをみつけた。捜索用ジープの強いライトが海岸の一点を照らしだしたとき、そこにうずくまっているクニと、クニをかばうように立っているライルの姿がはっきりと見えた。ライルは光に眼を掩いながらも、襲いかかっていった二匹の軍用犬のうち一匹を射殺した。

五台のジープは二人を半円形に取りかこんで、十本の光の矢を浴せた。もう一匹の犬を殺そうとライルが拳銃をあげたとき、MPたちはいっせいに自動拳銃を射った。最初にラ

イルが転って倒れ、それからうずくまっていたクニが空にのけぞって倒れた。MPたちがそばへ寄ってみると二人は蜂の巣のように顔と胸を貫かれて死んでいた。彼等はライルの死体だけをジープに乗せて運び去り、クニの死体はミミたちが引きとりにゆくまで放って置かれた。警察も主人も、クニの死体には手をださなかった。(類似例一)

2　福士礼子

福士礼子(二十三・和歌山県)は奈良のキャンプに勤めているあいだに二回妊娠し、二回とも堕胎した。彼女は金持ちのハンサムな兵隊となら誰とでも遊んだが、子供を産むのはいやだった。

戦争がはじまったとき、彼女はすでにキャンプをやめ、ヤンという下士官と春日神社のちかくに同棲していた。ヤンは一週一万円(=当時の平均世帯の生活費ひと月分)ずつくれたが、彼女はもっと欲しかった。ヤンが故郷に妻子を持っていることを彼女はほかの兵隊からきいて知っていたが、別に何も言わなかった。何人かの友達がアメリカ兵と結婚して渡米し、ひと月もたたないうち離婚されたり、離婚されないまでもまわりのひとびとの軽蔑や反感のなかで、おどおどしながら暮していることを、手紙なんかで知らされている

だけに、彼女は正式の結婚や渡米に魅力を感じなかった。米軍はまだ十年や二十年、きっと日本にいるだろうから、そのあいだ気に入った相手と次々に遊んで、金をためるようにすればいい、それが自由というものだ、と彼女は考えていた。

八月、ヤンの部隊は急に朝鮮へ出発した。二週間たてば新しい部隊と交替に帰ってくることができるから、心配しないで待っててくれ、と彼はいいのこしていったが、三週間たっても帰ってこないので、彼女はキャンプへ行き、前に関係のあった兵隊をよびだしてきいてみた。「これは秘密だが」とその兵隊は声をひそめていった。

「奴の部隊は向うへ行って九日目に全滅したんだ。俺たちも明日の晩行かなきゃならない。当分ナラには米軍は少くなるよ。」彼女は大声をあげて泣き、出発する前にきっと遊びにくるようにその兵隊と約束して家へ帰った。ヤンが死んだことはそれほどこたえなかったが「ナラには米軍は少くなるよ」という言葉はひどくこたえた。自分はどうしてこんなに不幸なんだろうと思うと、彼女の涙はいつまでもとまらなかった。

キャンプがみんながらあきになっても、彼女はアメリカ兵と遊ぶたのしさが忘れられなくて、大津や伊丹の方まで情夫の候補者をさがしてあるいた。が、どこの部隊も出動中なので、せいぜい一晩きりの相手がみつかればいい方だった。ヤンと暮していたとき同様のぜいたくな食事をし、どこへ行くにもタクシーに乗ったりしたので、彼女はたちまち困ってきた。ヤンがいたときは一月や二月、部屋代を忘れてもなにもいわなかった家主は、ヤンが死んだと知ると急に警戒して、部屋代は毎週きちんと払ってもらおう、と乱暴な口をきいた。彼女はラジオを売り、洋服だんすを売り、腕時計と舞踏靴を売り、外套を売り、とうとう服や食器まで売りはじめた。

そんなにしながらも、夕食どきになると彼女はタクシーで街へでて、ビフテキをたべたりビールを呑んだりした。たまに留守部隊の兵隊が寄ってきても、どこにも仲間の女たちがあぶれているので、ひどく安い値段でないと商談はまとまらなかった。夕食をおごっただけで一晩遊んでいった兵隊さえあった。

着ている服とハイヒール一足だけになったとき、彼女は大阪へ流れていった。一日食べないでキャンプのそばをうろついていると、ポン引らしい男がやってきて、ついてこいといった。つれられていったのは和洋客だれでも泊める怪しげなホテルで、彼女はそこで小さな部屋とふとんと食べものを与えられた。その家には四十人からの女たちがいたが、客は半分もこなかった。彼女がその家の主人のところへお礼にいったとき、体じゅうに刺青をした主人はこんなふうなことをいった。

「飢え死にしかけていたのをひろうてやったんやから、この恩、一生かかってもかえさにゃあかんぜ。戦争はじまったいうて佐世保が景気ようなっとるさかい、お前等つれて明日佐

世保へいったる。佐世保にでかいホテルたててじゃんじゃん兵隊とねかしたるわ。お前等、一生の恩がえしや思うたら、かせいだ金みんなこっちへ収めんとあかんぜ。」

その翌日、礼子はほかの女たちといっしょに、暴力団に監視されながら九州行きの汽車に乗った。（類似例三一）

3　Y・Lグループ

都心いったいをなわばりにしていたY・Lグループの街娼たちにとっても、朝鮮での開戦は大きな打撃であった。開戦直後の外出禁止期間中、彼女たちは一銭の収入もなかったために、やむなく日本人の袖をひかなければならなかった。（ヤンキーズ・レディズというグループ看板をかけている手前、はじめはどうしても日本の男によびかける気がしなかった。しかし飢えが迫ってき、暴力団からも強制されたので、彼女たちは米語で日本の男を誘惑し、米語で答える男だけをお客にした。但し、しばらく前から姿を現しはじめていた警察予備隊の隊員だけは、アメリカ兵まがいの恰好をしているので、米語を知らなくても、特別お客として取扱った。）外出禁止は二週間で解かれたが、いつ出動命令がでるかわからないので、アメリカ兵は基地から半径五キロ以上の遠くへ足を伸ばすことができなくなり、したがってアサカ・タチカワ・カワサキなど、彼女たちのなわばりに最も近いキャンプの兵隊さえ、もう都心には姿を見せなくなってしまった。

彼女たちは自分の方からそれらのキャンプ周辺に出張していったが、キャンプに勤めているアルバイト洋娼やその土地の街娼のなわばりとかちあうため、ごく安い値段で――ときには煙草一箱とひきかえにさえ――体を売るよりほかはなかった。しかし彼女たちの収入ががた落ちになるとともに、ボスや暴力団は彼女たちの保護を中止又は停止したから、暴力団どうしの争いがおこることは前よりもずっと少くなった。

暴力団が彼女たちをほとんど見捨てたということは、逆にいえば彼女たちが暴力団の支配からほとんど解放されたということであった。しかし、この解放は同時に飢えにつながっていた。

また暴力団の支配が失われるとともに、暴力団の利益に奉仕していたアネゴの権威も動揺してきた。

まずY・Lのうちでも反アネゴ派の指導者だったホワイト・エミ（二十六？　本名と出身地はわからない）が分派の十五人ほどをひきいてキャンプ・トコロザワ周辺に移動したのをはじめ、トシ子（二十・東京）が六人の仲間とキャンプ・アツギへ、ハニイ（二十五・静岡県・本名はわからない）とハニイシスターズ十一人がキャンプ・ヨコタへ、ミチ（全

部わからない）ら十人ほどがヨコスカへ、それぞれアネゴの支配を離れて移動していった。アネゴの東京ジェリイ（二十八？・東京・本名わからない）自身とY・Lの主力四十人ほどは、それでもなお何日か都心に頑張っていたが、アメリカ兵が一人も来なくなってしまったので、ボスを通じて佐世保の洋娼ホテル経営者と連絡をとったのち、九月の終りごろついに東京を離れた。（類似例多数）

4　ハニイ

もとY・Lのメンバーだったハニイは、Y・Lが分裂したとき、できることなら十一人の仲間といっしょに家を一軒借りて、洋娼ハウスをはじめたいと思ったが、ヨコタにはもうほかの土地から街娼がたくさんのりこんできていて、どの洋娼ホテルもバーの裏二階も民家の空いた部屋もいっぱいだったため、やむをえず、ひとりずつばらばらに満員のなかへ割りこんでゆかなければならなかった。

Y・Lのハニイといえばかなり名が通っていたので、彼女はわりと待遇のいい――といっても肉体代の三分の一とチップだけが自分のものになるだけのことだったが――キャバレーにはいることができた。キャバレーの主人というのが、前科のある不気味な男だった

とはいえ、ボスでも何でもなく暴力団とたいして関係もないらしいのが、彼女には珍しいことに思われた。キャバレーそのものもごく最近はじめたばかりらしく、女の小部屋もまだ七つしかなかった。

その部屋のひとつをあてがわれて、ハニイは毎日一人か二人の兵隊に体を売った。日によってあぶれることもあった。街娼になりはじめ、一晩七人も八人も相手にしたころを思いだすと、兵隊の減ったことと彼女の仲間のふえすぎたことが、はっきり実感として迫ってきた。ヨコタは空軍基地だったので、彼女のところへくるのもみんな爆撃機乗りや戦闘機乗りばかりだった。彼等は一様に血走った眼をし、部屋へはいってくるなりできるだけ大きな音でジャズ・レコードをきかせろとわめいた。

例外はひとりもなかった。気狂いじみたジャズの騒音のなかで、彼等は憑かれたように彼女の体を虐げ、突然泣きだしたり、泣いている最中に突然笑いだしたりした。彼等はぞっとするような声で《This's last pleasure in my life!――これがこの世で最後の快楽だ――》とつぶやきながら、出撃時刻ぎりぎりまで彼女をしゃぶりつくしていった。彼女の裸のまま死んだようによこたわっていると、やがて悪魔の叫びのような爆音がおこり、いまのいままで彼女を抱いていた男をのせたジェット機やB29が、屋根の上を通って西の空へとび去ってゆく。

彼女が不安なねむりの中でいやな夢におびえ、ふらふらおきあがってぼんやり考えこむころ、彼らはふたたび西の空からかえってくることもあるし、あるいは永久にかえってこないこともある。……

そんな暗い毎日の中で、ハニイは学徒兵出身のボーゲンという士官を好きになった。彼は彼女よりひとつ年下で、ジョージアの故郷に美しい恋人を——写真でみるとE・Gという映画女優にそっくりの美しい恋人を持っていた。彼は出撃の前には必ずやってきて、ほかの兵隊同様、ハニイを変態的にいじめぬくのだった。いじめぬかれながら、彼女は眼をとじてアイ・ラブ・ユーをくりかえしていた。……ある日、朝はやくとびこんできた彼は、心臓が凍るような口調で《This's last pleasure!》とつぶやいた。彼女はしっかり男の首にしがみついていたが、夢うつつのように、「エリイ！　エリイ！」とよぶ声をきいたので思わず眼をひらいてみると、どうだろう、彼はタタミの上に恋人の写真を置いて、ハニイを抱きながら遠い恋人によびかけているのだった。……彼のジェット機が屋根の上をとび去ったとき、彼女は大声で泣いた。そして彼と彼女の予感のとおり、彼のジェット機はついにかえってこなかった。

彼女は洋娼をやめようと決心して一週間ほど田舎の親戚のところへかえり（彼女の両親は空襲で死んでいた）、田の草取りの手伝いなどしたが、そのみじめさにたえきれなくなって

すぐにとびだし、またキャバレーへかえってきた。主人や仲間たちはみんな喜んでむかえた。（類似例二十一）

5　ヨコタの女性たち

ヨコタ空軍基地で働いていた日本女性たち——タイピスト、看護婦、クラブ・メイド・事務将校づき秘書、メッス・メイド等々——は、戦争がはじまると同時に「機密保持の必要があるため」基地内にかんづめにされ、家にかえることができなくなってしまった。

日やといのようにして働いていたメイドや掃除婦（クリーナー）などで、帰宅を許された者もなかったわけではないが、その数は知れたものだった。かんづめにされた女性たちのなかには、職業的・半職業的な洋娼や基地内勤務のスペシャル・メイドがたくさんいた。しかしそうでない女性たち——日本の女性としての、純潔な女性としての誇りを守って働いているひとたちも決して少くなかった。かんづめにされてからというものは、こうしたまじめな女性たちは、夜昼たえまなしにこき使われ、殺気立った兵隊たちにちょっとしたことでなぐられたり射たれたりした。

ベッドも与えられないので、夜おそく——時には明け方に僅かな睡眠を許されるときに

は、職場の机や並べた椅子の上で、服のままでねむらなければならなかった。アルバイト洋娼たちはみんな体を代償にベッドや暇な時間をもらうことができたが、まじめな女性たちはたとえ睡眠不足や虐待のために倒れるようなことがあっても、いままで守りとおしてきた純潔を失うまい、とかたく誓いあって頑張っていた。蒼ざめた顔で椅子によりかかってうとうとしている彼女たちを兵隊や日本人の監督やガードが棒で突ついたり、椅子ごと床に蹴倒したりした。

すると毎日充分な睡眠をとって、仕事もせずにぶらぶらしているスペシャル・メイドやアルバイト洋娼がそれを眺めて、「オオ、ワンダフル！」などといいながら兵隊といっしょにげらげら笑いころげるのだった。午後の二時か三時ごろになると、アルバイト洋娼たちは厚化粧をはじめ、やがて虚勢をはって立ちあがり、どこへともなくいなくなる。職場の米人監督や日本人監督も、彼女たちには愛想よく「グウナイ！」を投げかけ、彼女たちのさぼりについては何も言わなかった。

セカンダリイ・タイピスツの部屋ではその頃になると六十人の女性のうち三十四、五人がいなくなった。サージャン・メッスでは四十人のうち二十七、八人がいなくなった。またクラブ・メイドの溜りでは四十人のうち三十人ほどがいなくなり、ダウン・メッスでは五十人のうち四十人以上が、ホスピトウでは同じく五十人のうち三十五人ぐらいが、それぞれ消えてしまった。いちばんひどいのはオフィサー・クラブとスペシャル・タイピスツの部屋で、オフィサー・クラブからは三十七人のうち三十四人が、スペシャル・タイピスツの部屋からは二十五人のうち二十四人が、残っている女性に嘲笑を浴せながらでていった。更に、これを書くのは気がひけるのだが、バンク・サーヴィスにいたっては、二十人だか二十五人だかの女性が全部姿を消してしまうのだった。

これらアルバイト洋娼たちは、士官・下士官の個室や兵隊たちの宿舎にひっぱりこまれて、酒や煙草をのみながらのんきな夜をすごすわけである。そのあいだ、彼女たちに割当てられた仕事は、まじめな女性たちが全部かわってやらなければならぬ。オフィサー・キャンプの数十の部屋に淫らな赤い電燈がきらめき、桃色のカーテンごしにアルバイト洋娼たちの笑いごえが洩れてくるとき、すぐその前のスペシャル・タイピスツの部屋では、たったひとり残った宮田蘭子（十九・浦和市）が、山のような書類に埋もれ、連日の睡眠不足と虐待に疲れはてながら、なおも一心にタイプを打ちつづけていた！

七月十日、午前一時十五分のことである。（彼女の前に大きな柱時計がかかっていたので、彼女はその時間をよくおぼえている。）突然部屋のドアがあき、酔っぱらったアメリカ兵がひとりはいってきた。彼は何かわめきながら彼女のそばまでくると、くしゃくしゃになった紙きれを差出し、「これをコピーしろ」といった。受取って読んでみると、それは思わず顔の

赤くなるようなエロ雑誌の一頁だった。彼女が「ノウ！」と言おうとしたとたん、彼は彼女の椅子を床の上に倒し、ころがって頭を打った彼女の上へ酒くさい臭を吐きながら襲いかかった。

彼女は手にふれる範囲内に何か武器はないかと探したが、ペンが一本ころがっていたきりだった。それでも彼女はそのペンをにぎって、男の背中へ心臓までも通れとペン先をつきさした。……だが折れてしまったので、今度はこぶしを固めてなぐろうとしたが、その前に彼は彼女のワンピースのバンドをひきちぎり、その裾を彼女の頭の上までまくりあげたので、彼女の眼は何もみえなくなり、両手は自由を失った。はねかえそうとしたが彼女の力では全然だめだった。彼女は大声で助けをよんだが、それは夜間飛行のジェットの爆音に打ち消され、すぐとなりの棟のオフィサー・クラブの女性たちの耳にさえとどかなかった……何分かののち、彼女の血だらけの恥部をそのままに、兵隊は「ヒュウ！」といいながら立ち去った。

その同じ晩、サージャン・メッスのメイドたちも犯された。アルバイト洋娼がいなくなったあと、少い人数で食器を洗ったりビール瓶を運んだりしていると、札つきのスペシャル・メイドでしかもメイド仲間のボスをもって自ら任じているサリーというのがやってきて、特別監督（ルーラー）の命令だから七人だけ下士官宿舎へすぐくるように、あとのひとたちはビールを持って一般宿舎の方へいくように、といった。

特別監督（これは開戦と同時に設けられたもので、日本人監督の上にいて彼女たちを直轄していた。現在――一九五三年――はこれは廃止されている）の命令に従わなければ、いじめられたうえ首になることはわかりきっていたので、彼女たちは不承不承に下士官宿舎と一般宿舎へゆき、ビールをおいただけで逃げかえろうとした。しかし、手ぐすねひいて待っていた兵隊たちは彼女らをとらえ、約三十分ほどで全員を凌辱し終えた。この場合は彼等の拳銃が大きな役割を果した。逃げることができた者はひとりもなかった。

翌日、セカンダリー・タイピスツ四人が、格納庫のなかで犯された。続いて二人がガソリン・タンクの横で犯され、最後に十人（十二人？）がメッス・メイドたちの場合と同様、特別監督の命令で宿舎へ送りこまれ、自動小銃をつきつけられて強姦された。

もっとも悲惨だったのはホスピトウで純潔を守りつづけていた十五人の看護婦たちの場合である。彼女たちはアルバイト洋娼でなかったがゆえに、故意に患者輸送機に乗せられ、戦場へ連れてゆかれたのだ。（七人はその直前についに諦めて暴行を受けたため危うく朝鮮行きからまぬがれることができた。）同じ頃北九州から朝鮮へ連れてゆかれたメッス・ボーイのM氏（希望により特に名を秘する）が目撃したところによれば、これら八人の看護婦は釜山東方約四十一キロのピーチ・ヒル戦線で、米軍負傷兵の手当を強いられ、また何百人と

いう兵隊のためにたえまなく肉体をけがされて、死骸同然になっていたそうである。

七月二十七日（M氏の記憶によれば二十九日だが、公式記録では二十七日になっている）、優勢な北鮮軍の攻撃を受けて部隊が退却したとき、彼女たちはあるけないままに戦線においてきぼりをくった。M氏は何とかして助けたいと思ったが、自分にも危険が迫っていたのでどうすることもできなかった。彼女たちは砲弾のなかでひとかたまりになってたがいにかばいあっていたが、やがて硝煙がその姿を掩いかくしてしまった。

北鮮軍がそのあたりまでやってきたとき、米軍の軽爆撃機編隊がとんできて、丁度彼女たちのかたまっているのであろう場所めがけてナパーム弾をばらまいた。更に後方陣地の砲兵隊がロケット弾を三時間ばかり打ちつづけたので、そのあたりの地形はすっかり変ってしまい、北鮮軍が一時退却したあとふたたびM氏がいってみたときには、彼女たちがこの世に生きていたという証拠は何ひとつなかったという。（類似例六）

第二章

開戦・売春恐慌・戦闘基地へ・完全街娼形態の崩壊・「戦争遂行のための売春」

すべての戦争政治家・戦争資本家・原爆製造業者・職業軍人等々を驚喜させた朝鮮戦争の勃発は、日本全土の性格を占領地から前進軍事基地へ急速に変貌させた。開戦後一ヵ月で共産軍は早くも釜山を中心とする半径六十キロの弧のなかへ米軍を追いつめ、米軍は東京都の面積にもみたないこのせまい地域に、生きのこった在鮮部隊の全部と日本占領軍の大半を投入したために、在日米軍の数はぐっと少くなった。

一九五〇年九月の半ば頃から、米本国・カナダ・オーストラリア・英本国等々から、やっと増援部隊が到着しはじめたけれども、これらの兵力は日本を素通りするだけですぐ戦場に向うか、あるいは空軍・海軍・補給部隊として直接的戦闘基地（軍港・飛行場）に待機するかだったので、日本本土に腰をおちつける数は依然として少かった。

十月に開始されたいわゆる零号作戦（仁川に上陸して共産軍の補給路を断ち、クリスマスまでに全朝鮮を征服する予定の作戦）のため、在日兵力はさらにぐっと少くなり、その状態が二三ヵ月続いた。しかしこの「英雄的作戦」は、結局むざんな失敗に終り、戦争はやがて長期化の様相を示しはじめることになる。

開戦から長期戦化の見通しが濃くなってくるまでの約五ヵ月間、不意うちの怖しい不景気が洋娼たちを襲った。もともと完全街娼的・アルバイト洋娼的・形態をとらなければならなかったほど肉体の供給が過剰だったところへもってきて、突然戦争がはじまり、在日米軍の数がいきなり減ってしまったのだから、この売春恐慌は異常に激烈で且つ予期しなかった混乱をまきおこさずにはすまなかった。

まず、恒久的にまたは一時的に脱落することのできる女性たちが洋娼群から脱落していった。脱落することのできた女性たちとは、洋娼をやめてもなんとか生活の出来る、あるいは生活のあてのある女性たちのことである。

次いで、恒久的にまたは一時的に転業することのできる洋娼たちが転業した。積極的に転業した者もあり、いろいろな圧力によって転業させられた者もある。和娼窟（日本人むけの売春街）の支配者が同時に洋娼（街娼）を支配する暴力団のボスだったような場合には、あぶれた街娼がそのまま和娼窟や一般の赤線区域に吸収されるという事態がおこった。

一部分の街娼はそのまま日本人用の街娼に転業し、また一部分は五〇年八月から設置された警察予備隊用の集娼（公娼）にきりかえられた。だからこれらの女性たちは「転業」したとはいえ、洋娼から他の種類の売春婦に転業したのであり、売春婦から他の種類の職業に転業したわけではなかったのである。

したがって、この恐慌時代をあくまで洋娼として生きぬかなければならなかった者は、とりも直さず、ほかに生きてゆく方法をもたなかった女たちだったことになる。この激烈な売春恐慌は、脱落・転業できる女たちが脱落転業せずに洋娼を続けていられるような、そんな生易しいものでは決してなかった。しかも、脱落・転業する者がすべて脱落・転業しつくしたあとでさえ、洋娼の数は四万人から四万五千人もいだのであるから、洋娼はなお過剰であったのである。

当然、肉体のダンピングがおこなわれた。完全街娼化が開始された四八年から四九年にかけては、洋娼の肉体価格は全国平均ショートタイム四七〇円、オールナイト一五三〇円だったのに、五〇年八月の終りにはショートタイム一五五円、オールナイト三九〇円にまで下落した。この一年半のあいだに全国平均物価指数が四八年を一〇〇として一一九にあがっていることを考えあわせれば、これは甚だしい暴落である。しかも、同じく四八年には、どんな不景気な日でもショートタイムの客が一人か二人は必ずあったのに、五〇年八

月には四日にいっぺんショートタイムの客にぶつかればいい方だった。

前述のハニイの例のように、毎日客をとれた者もないわけではなかったが、反面、二週間パンと水で飢えをしのいだあげく、やっとつかまえた二人の兵隊にオールナイト一五〇円で体を売った洋娼もあった。彼女たちからの搾取が不可能になったために、ボスと暴力団はその配下にある洋娼たちを全部見捨ててしまった。

売春恐慌は、軍港・飛行場などのいわゆる戦闘基地以外の場所にいた洋娼たちの上に、特に猛威をふるった。極端な場合には、あるキャンプの砲兵部隊四千八百人が十五人の留守兵をのこして全員出動したため、そのキャンプ周辺にいた約二千人の洋娼がほとんど全部あぶれるという例さえ見られた。そこで、戦闘基地以外の場所にいた洋娼たちは、洋娼を続けようと考えるかぎり、その場所を去って北九州・大阪付近・東京付近・東北の三沢や北海道千歳などの戦闘基地へ集中してゆくほかに道はなかったのである。

戦闘基地への洋娼の集中は、前述のY・Lグループの典型的な例に見られるように、ボス＝暴力団＝アネゴ支配からの街娼たちの離脱——街娼グループの分解、いいかえるならば完全街娼形態の崩壊というかたちをとっておこなわれた。このことは、職業的洋娼の漸増にとって最大の障害だった諸条件を除き去り、五〇年の終りから五一年にかけて爆発する売春ラッシュ——洋娼数の異常な増加を受入れるための無条件の態勢を準備したという意味で、きわめて重大なことであった。

戦闘基地は戦場に直結する。彼女たちがそれまで見なれていたような、のんきな、だらけきった占領地の情景はもはやそこにはなかった。今夜彼女たちを抱いた兵隊は、明日戦場で死ぬかもしれない。彼等は戦場にゆく前の絶望的な時間を彼女たちとねるだけである。戦場からかえってきてまた戦場へゆくまでのむなしい瞬間の不安を彼女たちの体でまぎらすだけである。戦闘基地に未来はなく、あるのはただ瞬間的な快感ばかりである。

以前と同様、それが売春であることに変りはなかった。しかしそれは以前の売春と本質的に異った売春であった。そして洋娼たちの大部分は、直感的にそのことに気づいた。彼女たちは、はじめて戦闘基地で肉体を売ったときの気持を、こんなふうに表現している。

「真暗で、重苦しかった。強制的なような、いやあな気がした」。「東京の空襲の最中に、動員されていた工場の防空壕のなかで、偶然いっしょにはいった大きらいな先生と、怖しさに無我夢中で何したことがあった。そのときと似た気持、もうだめだと思った」。「戦争はつくづくいやだと思った。兵隊たちの顔までが変ってしまいました。未来のない兵隊たちの心が、抱きあっていると私の心までしみ通ってきた」。「こんなことなら、ふつうの日本人

の方がましだった。私の絶望は、お金がないからばかりではなかった。私は後悔しました。戦争のため、なにもかもだめになった。ジェット機の爆音をききながら兵隊といると、気狂いになりそうだった」。「彼のやり方はまるで強姦だった。私は仕方がない、商売だもの、おとなしくしているのに、彼は強姦のようにするのだ。出撃時刻の一時間前にかえらなければいけないのに、十分おくれて、また一度していった。かえるとき私を何度もなぐって、ぎゃあというような声で泣いて行った」。「兵隊たちは、飛行服のにおいやらガソリンのにおいやら、していました。でも、私にはそれが血のにおいのように思われてならなかった……」。

また、アメリカ兵たちの方でも、前のようなのんきな、享楽的な、暇つぶし的な気持で彼女たちを抱くことができなくなってしまった。彼等は戦闘基地での洋娼との交渉についてこんなふうに述べている。「……朝鮮の制空権は、こっちに四十五%、奴等に四十五%あった。残りの十%はたえずとったりとられたりしていた。……七月中だけでも、俺のグループのうち三分の一死んだ。俺自身も今死ぬかというような危い目にしょっ中でくわした。基地にかえると、くたくたになって、そのくせどうしてもねむれなかった。神経はビリビリで、そのへんのジャップを片っ端からぶちのめしたいと思った。……笑われるかもしれないが、戦争がはじまってから二ヵ月ぐらいはY・S（Yellow Stoolの略で、黄色い便器という意味、洋娼のことを彼等はこういう。日本の女は、彼等にとっては単なる便器にす

ぎないのだろう）のところへいっても全然快感がなかった。そしてY・S（黄色い便器）の部屋をでるとき、征服感というか一種のサディズムが充分に満されていないと、次の戦闘では必ずへまをやらかすのだった」。

「……俺は戦争を契機として、完全に獣的になった。Y・Sを買わないでいた方が体のためにもいいし、眼も調子がいい（これは空中戦闘で最も大切なことだ）のは知っていた。しかしどうにか命びろいして基地へかえり、次の戦闘を待つあいだ、女でも抱かなけりゃ気が狂いそうだった。俺は前にオキナワ戦に参加したことがあるので、そのときのことを思いだしたが、そのときはこんなじゃなかった。俺の友達だが、Y・Sの耳を片っ方食いちぎった奴もいた……」。

「……今度の戦争はいやだった。俺はイクコというエキゾチックなパンパンと、俺が飽きるまでという条件で専属契約を結んでいた。俺たちは、ふつうのG・IとY・Sの関係にくらべると、かなりまともな愛し方をしていたといえるんじゃないだろうか。つまり精神的にもいくらかつながっていたわけだ。俺は彼女にいろいろサーヴィスした。しかし今度の戦争がはじまり、ダグラス（輸送機）の無電士としてしょっちゅう朝鮮へとぶようになると、彼女にデリケートなサーヴィスなんかする元気はなくなってしまった。一方、明日にでも戦死するかもしれないと思うと、生きているうちにできるだけ愉しんでおきたいとい

う欲望が頭をもたげて、俺は獣のようになった。彼女を鞭でひっぱたいたり、なぐりとばしたり、散々いためつけているあいだだけ、俺は戦場の怖しさを忘れたようだ。少くとも一生けんめい忘れようと努めた。そして快楽を味わいつくしてしまったあと、俺ははじめて次の戦闘に立ち向おうという、絶望みたいな勇気みたいなものがちょっぴり湧いてくるのを感じた。」

戦場に直結した戦闘基地で、「血のにおいのする」兵隊たちに肉体を売らなければならなかった以上、洋娼もまた必然的に戦場に直結する運命をまぬがれることはできなかった。戦争がはじまるまでの彼女たちの役割は、ただ故郷を離れた兵隊たちに肉体的慰安を与えるだけのものにすぎなかったが、戦争がはじまってからの役割は、もうそんな単純な、受動的な、消極的なものではなくなった。

戦闘するアメリカ兵たち——直接戦闘にたずさわるアメリカ兵たちを肉体的に慰めることは、彼等をして戦争の悲惨さを、戦争というものの本質を、忘れさせる役割ではなかったか。彼等の懐疑と恐怖を、性欲のかたちに変えて消散させ、次の戦闘への意欲をかきたてる役割ではなかったか。彼等の消耗した戦闘能力を再生産するための「戦場慰安婦」としての役割ではなかったか。つまり彼女たちは、その意識すると否と、またその好むと否

とに拘らず、戦争協力者としての立場に立たされたのではなかったか。いや、彼女たちが兵隊の戦闘能力を再生産する任務を受持った以上、それはすでに戦争協力者などという生ぬるいものでなく、戦争遂行のための欠くべからざるひとつの要素、戦争を支える数多くの力のひとつ、戦闘基地の基本構造のひとつの部分としての役割を果すものではなかっただろうか。

戦闘基地に集中した・させられた・せざるをえなかった彼女たちが、それまでの生活と本質的に異るものとしてまず直感的に気づいたのは、まさにこの「戦争遂行のための売春」の、歪んだ、不気味な、救いのない、そして狂おしい性格であった。